

# 帛書『繆和』第二十四章にみえる説話と易の引用について

——『呂氏春秋』『淮南子』『説苑』との比較を中心に——

渡 邊 大

## 一、はじめに

『繆和』は、いわゆる「馬王堆帛書易伝」の一篇である。

「馬王堆帛書易伝」は、『二三子問』『繫辭』『易之義』『要』『繆和』『昭力』の六篇からなるが、各篇の体裁は互いに異なっており、六篇は一時一人の作とは考えられないことがすでに指摘されている。また、個々の篇についても同様に必ずしも一時一人の作とは限らず、本来は成立を異にするいくつかの部分から構成され、数段階の編集を経た後に一篇としてまとめられ帛に抄写されたものもあるということが明らかに<sup>(1)</sup>なっている。『繆和』についても、全二十四章のうち、はじめの十二節が「繆和問於先生曰……」「呂昌問先生曰……」などではじまる問答体、続く六節が「子曰……」ではじまる独白体であるのに対して、おわりの六節はいずれも歴史的人物の登場する故事であり、それぞれ文

体が異なっていること、また、卦爻辭を引用する際には、はじめの十二節および次の六節が、「故易曰……」「周易曰……」もしくは「川之六二曰……」などとするのに対して、おわりの六節は、いずれも「易卦其義曰……」という形式をとつていて体例も異なっていることから、決して一時一人の作ではなく、本来、別々に通行していたものがある時期に一つにまとめられたものと考えられる。これまで馬王堆帛書については、成立を異にする複数の資料を一つのもとまつた資料として扱うことにより種々の混乱が生じてきた。<sup>(2)</sup>『繆和』がいくつかの材料をもとに一篇にまとめられ、ひとつの帛に抄写された契機、また「馬王堆帛書易伝」の他の五篇や「帛書六十四卦」とともに出土した所以が考究されなくてはならないのはもちろんのことであるが、その前段階として、まず、『繆和』を構成するそれぞれの部分が十分に検討されなくてはならない。そのような

考えのもと、本稿では、比較的独自性の強いと思われる終わりの六節の中、『繆和』最終章に当たる第二十四章を取り上げる。第十九章から第二十四章までの六節は、いずれも、まず歴史的人物の登場する故事が語られ、その最後に、「易卦其義曰……」として易が引かれて締めくくられるという構成になっている。そしてその故事の多くは秦漢期に成立した伝存文献の中に類似のものを見いだすことが出来る。第二十四章と類似の故事は『呂氏春秋』『淮南子』『説苑』にみえている。これらはいずれも明確な意図のものと編纂された書物であり、それぞれの立場が故事にも比較的明瞭に反映されている。そこで本稿ではそれぞれの書物に載せる故事との比較を通じて、『繆和』において、故事がどのように意味づけられているのか、また、どのような意図によって易が引用されているかについて検討を加えることにする。

## 二、故事の比較・検討

まず『繆和』第二十四章にみえる故事を掲げる。(なお原文では故事の直後に易が引用されているが、それについては後ほど検討を加えるのでここでは省略する)

趙閭子欲伐衛、使史黑〔往睹之。期以〕卅日、六十日焉反。閭子大怒、以爲又外志也。史黑曰、吾君殆乎、大過矣。衛使欒柏王相、子路爲浦、孔子客焉、史子突焉、子贛出入於朝而莫之留也。此五人也、一治天下者也。而皆在衛。□□□□□也□□□□又是也者倪舉兵而伐之乎。

趙簡子(趙閭子)は衛国を攻めようと企てて、史墨(史黑)を偵察に派遣した。当初、その期間は三十日とされていたが、史墨は六十日後になってやっと戻ってきた。趙簡子はそのことに大変腹をたてて、史墨には「外志」があるのではないかと疑う。しかし史墨はそれは大きな誤りであると逆に趙簡子を諫め、衛国には、蘧伯玉(欒柏王)・子路・史鰌・孔子・子贛など一人でも天下を治められるような人材が五人もいるのだから、そのような国は攻撃すべきではないと報告する。

帛の残欠などにより明らかにしたい部分も残るが、以上が故事の大筋である。続いて、『呂氏春秋』『淮南子』『説苑』にみえる故事を掲げる。(なお故事を承けての意味づけをしている部分に傍線を付した)

『呂氏春秋』恃君覽・召類篇

趙簡子將襲衛。使史默往睹之、期以一月。六月而後反。趙簡子曰、何其久也。史默曰、謀利而得害、猶弗察也。今蘧伯玉爲相、史鯀佐焉、孔子爲客、子貢使令於君前甚聽。易曰、渙其群、元吉。渙者、賢也。群者、衆也。元者、吉之始也。渙其群元吉者、其佐多賢也。趙簡子按兵而不動。凡謀者、疑也。疑則從義斷事、從義斷事則謀不虧、謀不虧則名實從之。賢主之舉也、豈必旗將斃而乃知勝敗哉。察其理而得失榮辱定矣。故三代之所貴無若賢也。

#### 『淮南子』主術篇

蘧伯玉爲相、子貢往觀之、曰、何以治國。曰、以弗治治之。簡子欲伐衛、使史默往覲焉。還報曰、蘧伯玉爲相、未可以加兵。固塞險阻、何足以致之。故皋陶瘡而爲大理、天下無虐刑、有貴于言者也。師曠瞽而爲太宰、晉无亂政、有貴于見者也。故不言之令、不視之見、此伏羲神農之所以爲師也。

#### 『說苑』奉使篇

趙簡子將襲衛。使史默往視之、期以一月。六月而後反。簡子曰、何其久也。黯曰、謀利而得害、由不察也。今蘧伯玉爲相、史鯀佐焉、孔子爲客、子貢使令於君前甚聽。易曰、

渙其群、元吉。渙者、賢也。群者、衆也。元者、吉之始也。渙其群元吉者、其佐多賢也。簡子按兵而不動耳。

三篇は、登場人物に多少の出入りや表記上の違いがあるものの（以下、煩を避けるために表記は、趙簡子・史墨・蘧伯玉に統一する）、『繆和』と同一の故事に取材していることは明らかである。しかしまたその一方で、それぞれの思想的立場が異なるために生じている差異もある。例えば、蘧伯玉は、『繆和』『呂氏春秋』『說苑』では衛国の賢人の一人として挙げられているに過ぎないが、『淮南子』主術篇では明らかに中心的人物として扱われている。主術篇は、君主の政治術・統治術を説いて、その要諦は、「無為」を事とし、「不言」の教えを行い、自身は「清静」にして不動であり、法度を厳格にして揺るがさず、因順を旨として万事を臣下に任せ、その成果のみを督責し、自らは勞することがないようにすることにあるとしている。<sup>(8)</sup>「無為」「不言」「清静」という語がいずれも『老子』にもとづくものであることから分かるように、主術篇は、為政者が無為の境地に在ることにより臣下（を含め万物）がおのずからその能力を発揮することになりすべてが完全に機能するようになるという思想に支えられている。何によつて国を

治めるのかという子貢の質問に対して蘧伯玉が「治めざるをもつてこれを治めん」と答え、故事の後（引用傍線部）に堅固な城塞も險阻な地形も（敵を防ぐのに）これほどの効力を持ちえないとその手腕が高く評価されるのも、無為の政治を標榜する『淮南子』主術篇の思想が故事に反映されたものと考えられるのである。また、『説苑』における篇名の奉使とは「君命を奉じて他国に使いすること」である。この篇に収められているのはいずれもその職責を全うした使者たちの故事であり、『説苑』を編んだ劉向がこの故事に見いだした意味もまたそこにあると考えられる。<sup>(9)</sup> 奉使篇の文章はほぼ『呂氏春秋』を襲ったもののようである。しかし、『呂氏春秋』の故事に対する意味づけは、その立場により、『説苑』とはおのずと異なつたものになっている。次に、『呂氏春秋』において故事を収める召類篇の思想的立場が故事にどのように反映しているのかを確かめる。

『呂氏春秋』の召類という篇名は、ある事象はかならずそれに類似した結果を招くという意味であり、この篇に通底する基本的思考法を端的に示すものである。<sup>(10)</sup> そこで召類篇は現状の把握が正確であればその行く末をも正しく判断することが可能になるという一種の法則を打ち出している

が、そのおもな関心は用兵にある。すなわち、ある国が「乱」であれば、かならず他国の侵攻を招くことになる、それを用兵に活かせというのがその主張である。召類篇は、用兵を「利」と「義」とから説明し、「利」にもとづく用兵と「義」にもとづく用兵との両者をともに肯定し、「乱」を討つのは「利」にしてかつ「義」であり「賢主」のなすところであるとす。逆に、他国からの侵略を防ぐには何よりも「治」が必要であるとす。なぜなら、ある国が他国に攻め入るのは「利」のためでなければ「名」のためであり、自国が「治」であれば、「利」を目的とするものも「義」を目的にするものも侵攻してくることがなく、「名」も「実」も得られないのであれば、いくら強国であつても他国を攻めたりはしないからである、と召類篇はその理由を説明する。ここでいう「義」「名」および「利」「実」は、「大義・名分」と「利益・実益」というほどの意味であらう。召類篇は、侵略行為を古代からあつたものとして容認し、それが「義」「利」のいずれを動機とするかには関係なく、相手が「乱」ならば攻めなくてはならず、「治」であればおしとどまらなくてはならないとする。そしてこの「治乱」の見極めを用兵の關鍵として何よりも重視するのである。以上を踏まえて、『呂氏春秋』に

おける故事を振り返る。

召類篇では故事の直後（引用傍線部）に、不確実さがつきまとう計略を全うするためには「義」により事を断ずるべきであると説いている。そして「賢主」は実際の戦いを経ずとも「理」を「察」することであらかじめその勝敗・得失を知ることができ、そのために「賢」を貴ぶのだとしている。これらはいずれもすでに見た召類篇の基本的思考に沿ったものである。では、『呂氏春秋』召類篇の故事において称揚の対象となっているのは、衛国の「治」を見極めた史墨であろうか、史墨の報告をもとに挙兵を取りやめた趙簡子であろうか。帰国が遅れたことを趙簡子にたずねられて「利を謀りて害を得るは、察せざるによるなり」と答えた史墨が「賢」とみなされていることは間違いないが、召類篇の冒頭および故事の直後に「賢主」という表現がみえていることからすれば、ここでは趙簡子の方により重きが置かれていると考えるべきであろう。そしてそのことは、次にあげる『呂氏春秋』有始覽・応同篇の記事によって確かめることができる。

凡兵之用也、用於利、用於義。攻亂則脆、脆則攻者利。攻亂則義、義則攻者榮。榮且利、中主猶且爲之、況於賢主

乎。故割地寶器、卑辭屈服、不足以止攻、惟治爲足。治則爲利者不攻矣。爲名者不伐矣。凡人之攻伐也、非爲利則因爲名也、名實不得、國雖彊大者、曷爲攻矣。解在乎史墨來而輟不襲衛、趙簡子可謂知動靜矣。

ここには召類篇の冒頭とはほぼ同様の文がみえている<sup>①</sup>。その主旨も召類篇と同じであることは、傍線部の「解は史墨の来りて輟めて衛を襲わざるに在り」というのが、「この段（応同篇）の例証は、史墨の報告によつて趙簡子が衛國攻略を思いとどめた故事にある」、すなわち召類篇に挙げた故事を参照せよ、という意味であることから分かる。そして、さらに続けて「趙簡子は動靜を知ると謂うべし」とあることから、『呂氏春秋』においては、「治乱」を見極めたその功は趙簡子に帰せられていることが確認できるのである。

以上より、『呂氏春秋』『淮南子』『説苑』において、故事に反映されているそれぞれの関心事および中心的登場人物をまとめれば次のようになる。

	関心事	中心的人物
『呂氏春秋』	用兵における治乱の見極め	趙簡子

『淮南子』	道家的無為の政治	蘧伯玉
『説苑』	使者のあり方	史墨

『呂氏春秋』との比較から気がつくのは『繆和』では趙簡子の評価が低く、それに応じて史墨に対する評価が相対的に高くなっているということである。例えば、『繆和』では、期日に遅れて戻ってきた史墨に対し、趙簡子は大変に腹を立ててその背信までも疑っている。また、それに対し史墨は「吾が君殆うきかな、大いに過てり」と趙簡子を諫めている。趙簡子はとも「賢主」に相応しいとはいえない扱われ方をしており、逆に、史墨は、そのような聡明とは言えない君主に仕えながらも偵察の任務を全うし正しい方向へ導く賢臣として描かれている。史墨に与えられた期日は『呂氏春秋』『繆和』ともに一ヶ月であるが、偵察から戻るのは『呂氏春秋』では六ヶ月後、『繆和』では六日後とされている。このようなところにも『繆和』には趙簡子を低め史墨を高めようとする意図が働いていることを認めることができる。さらには、故事の結びが、『呂氏春秋』では「趙簡子兵を按じて動かず」となっているのに対して、『繆和』では「いわんや兵を擧げてこれを伐つを

や」という史墨の発言で締めくくられているのも両者の違いを対照的に示しているといえよう。つまり『繆和』では史墨が故事の中心に置かれていると考えられるのである。続いて、『繆和』第二十四章における易の引用について、それが故事とどのような関係にあるのかを検討する。

### 三、『繆和』における易の引用について

『繆和』では、故事の直後に易が引かれて次のように続いている。

易卦其義曰、觀〔國〕之光、利用賓于王。易曰、童童往來、仁不達也。不克征、義不達也。其行塞、道不達也。不明晦、〔明〕不達〔也〕。□□□□、〔仁達矣〕。□□□□、義達矣。自邑告命、道達矣。觀國之光、明達矣。

引用の仕方はやや複雑である。原文中で傍線を付してあるのが易の経文で、まず、「易卦其義曰」として觀六四の爻辞の一部が引かれる。<sup>13)</sup>「易卦其義曰」という引用の仕方は他の資料には全く例を見ず、「馬王堆帛書易伝」でも『繆和』の終わりの六章にのみみえるものである。六章中の引用は、いずれも爻辞であり卦辞ではないのに「卦」と

いうのは疑問ではあるが、前述の故事を承けて「易ではこの故事の道理を次のように述べている」という意味であると思われる。そして、それに続いて、さらに「易曰……」として、咸九四・復上六・鼎九三・明夷上六・泰上六のそれぞれの爻辞の一部分と、觀六四が再度引かれる。傍線を付していない「仁不達」「義不達」「道不達」「明」不達」「仁達」「義達」「道達」「明達」の部分は易の引用ではなく、それぞれの爻辞が象徵する状況において、仁・義・道・明が実現しているか否かを示すものであり、その対応関係を整理すれば次のようになる。（括弧の中の数字は「易曰」以下で引かれる順番を示す）

- |                |   |              |
|----------------|---|--------------|
| (1) 童童往來……仁不達  | ↑ | (5) □□□□……仁達 |
| (2) 不克征……義不達   | ↑ | (6) □□□□……義達 |
| (3) 其行塞……道不達   | ↑ | (7) 自邑告命……道達 |
| (4) 不明晦……〔明〕不達 | ↑ | (8) 觀國之光……明達 |

これらの引用においてもっとも重きをなすのは、「易其義曰」と「易曰」とに二回みえている「国の光を觀る。用て王に賓たるに利し」であることは疑いを容れない。そして、すでにみたように『繆和』の故事において中心的役割

を担っていたのが史墨であつたことからすれば、この引用は、「国の光」たる賢人達によつて安定している衛の状況を見極めた史墨の「觀」察能力を称揚し、そのような史墨を「用て王に賓たるに利し」としているものであると考えられる。觀六四爻辞の引用から、『繆和』が重きを置いているのは、衛國を安定に導き趙簡子の企てを未然に防いだ賢人達ではなく、衛國の状況を見極め趙簡子に衛國への侵攻を思いとどませた史墨であることが改めて確認できるのである。しかし、依然、いくつかの疑問点が残る。例えば、「易曰」以下にみえる引用(8)の「觀國之光、明矣」における「明」という語は、史墨の觀察力および判断力に対する評価としてはいかにも適当な表現ではあるが、故事の結びとしては「易卦其義曰」の引用ですでに十分ではないかとも考えられるのである。そこで次に「易曰」以下の引用について、それぞれの意味するところ、故事のどのような場面・状況を念頭に述べているのか、仁・義・道・明の四つの徳の關係、さらに「易卦其義曰」の引用との關係などについて考える。

(1)の咸六四の爻辞の全文は「貞なれば吉。悔亡ぶ。憧憧として往來すれば、朋爾の思いに従う」である。「憧憧」については諸説あるが、『繆和』では、『説文』に「憧、意

不定也」とある意で用いられているようである。心落ち着かず行ったり来たりするのは、仁が達成されていないからであるというのは、史墨が偵察に行くに際に趙簡子の目を気にせざるを得ないような状況を指すものであろう。(2)の復上六爻辞「復るに迷う。凶なり。災眚あり。用て師を行る。終に大敗すること有り。其の國君に以ぶ。凶。十年に至るまで征する克わず」は、『繆和』では、直接には衛國への攻撃が不可能であり避けるべきであることを示すと思われる、他にも「復るに迷う」「終に大敗すること有り」「其の君に以ぶ」なども踏まえられていると思われる。また、(3)の鼎九三爻辞「鼎の耳革まる。其の行塞がる、雉の膏あれども食わず、方に雨ふらんとして、悔を虧く、終に吉なり」も、(1)と同様に趙簡子により史墨の自由な活動が制限されるような状況を指すのであろう。(4)の明夷上六爻辞「不明にして、晦し。初めは天に登る、後には地に入る」は、以上に挙げたような状態をまとめて為政者としての趙簡子の不明ぶりをあらわすものであろう。(7)の泰上六の「城隍に復る。師を用いるなかれ。邑より命を告ぐ。貞なれども吝。」は、引用部分の意味は未詳であるが、その直前の「師を用いるなかれ」が、史墨の趙簡子への報告内容を指すと考えられる。

以上をまとめると、(1)から(4)までは、趙簡子による政治の欠点が、(5)から(8)は史墨による功績が互いに対照され評価されていると考えられるが、『繆和』における易の引用は、卦や爻の吉凶や象・位・正不正などは関係がなく、断章取義的に故事のそれぞれの場面に相応しいような語句が選ばれているということが分かる。例えば、(1)の咸六四の爻辞自体からは「仁不達」と判断されるような根拠は何もないし、咸卦全体との関連も何ら見出せない。また、(4)と(8)における「明不達」「明達」との評価は、故事の内容からも理解できるが、そのほかの仁・義・道については、どうしてそのように評価されているのかは必ずしも明確ではない。これは、この故事の主張の中心は「明」にあり、仁・義・道はいわばその権威づけのために利用されたものだからであろう。

『繆和』第二十四章から、『淮南子』における「道家的君主術」あるいは『呂氏春秋』における「治乱の見極め」に当たるといえる思想をあえて抽出するとすれば、それは史墨のような状況把握の能力を持った臣下の重視ということになる。しかし、ただそれだけではないようである。『呂氏春秋』召類篇では、易の渙卦六四の爻辞は史墨のセリフの中で引かれており、故事の中で易は史墨の主張を裏打ち



#### 四、むすび

する権威としての機能を果たしてはいるものの、その目的はあくまでも「治乱の見極め」の重要性を主張・証明することにある。一方、『繆和』においては、易の引用は、故事の筋の外に置かれて故事全体を統べる働きをしている。

そこには、すでにみた能臣の重視という主張のほかに、易そのものの価値を高めようとする意図を見いだせそうである。すなわち『繆和』には、世界のあらゆる事象が易の中に含まれている、易によって万象が説明できるということを喧伝しようとする目的があつたと考えられるのである。

本稿で取り上げた第二十四章で、「易曰」として爻辞を引く部分は、実は終わりの六節が易を引く際の体例「易卦其義曰」からは外れている。これは『繆和』の編者がその最終章を締めくくるに当たって故事にあう文言をさらに易の中から探しだし後から加えたことを示す痕跡であると思われる。伝存文献には全くみえない語彙が『繆和』には集中してみえていることなどからも、『繆和』はただ既存の資料を寄せ集めただけではなく、一定の編纂意図のもと、ある程度の手が加えられていると考えられる。そして、第二十四章において「易卦其義曰」の後にさらに「易曰」の部分が付け加えられていることから、『繆和』編纂の目的は易の喧伝そのものにあつたと考えられるのである。

本稿では『繆和』第二十四章の故事を取り上げ、『呂氏春秋』『淮南子』『説苑』との比較を通じて、『繆和』において故事がどのように意味づけられているのか、また、どのような意図によって易が引用されているかについて検討を加えてきた。その結果、『繆和』では、衛の政治状況を正しく把握し、趙簡子に侵攻をあきらめるように進言した史墨が故事の中心的役割を担っていること、また、そこにはいわば尚賢的思想が読み取れること、が明らかにされた。そして、『繆和』の編纂目的は易の喧伝そのものにもあるのではないかと考えられた。さらにここからは易を利用して自身を政治の場に売り出そうとする儒家の姿が浮かび上がってくる。しかし、尚賢的傾向が『繆和』全体を覆うものであるのか、また、『繆和』の編纂意図が奈辺にあるのか、さらに『繆和』の終わりの六章そして『繆和』全体の中で改めて考え直さなくてはならないことである。これらの課題を確認して本稿の結びとしたい。

#### 注

(1) 王博『從帛書《繆和》到《淮南子・繆称訓》關於繆生易学

的「一種推測」(『國際易学研究』第二輯、華夏出版社、一九九六年四月) 参照。

(2) 拙論「帛書『三子問』の構成について」(『筑波大学中国文化論叢』一八、筑波大学中国文学研究室、一九九九年一月) 参照。

(3) 『繆和』には、分章の標識「・(墨圈)」が記されているが、帛の残欠により分章が定かでない箇所もあり、全体で何章に分かれているのかについて異説があった。鄧氏は二〇章、廖氏は二十四章、近藤氏は二十五章、趙氏は二十二章にそれぞれ分章するが、正しくは二十四章である。諸説の出所については、後注(7) および(14)を参照のこと。

(4) 厳密に言えば、第二十四章には「易曰……」として易の引用が見えている。この点については、後に触れる。

(5) 拙稿「帛書『経法』『十六経』『称』『道原』四篇の成立について——黄老との関わりを中心に——」(『中国文化』五十五号、中国文化学会、一九九七年)、『書評』Edmund Ryden著『黄帝四経 The Yellow Emperor's four Canons』(『中国出土資料研究』第二号、中国出土資料研究会、一九九八年六月)を参照。

(6) 第十九章は、『呂氏春秋』孟冬紀・異用篇、『賈誼新書』輪賦篇および禮篇、『史記』殷本紀、劉向『新序』雜事篇、梁元帝『金樓子』興玉篇、『芸文類聚』引『帝王世紀』に、第二十章は、『呂氏春秋』開春論・期賢篇、『淮南子』脩務篇、『史記』魏世家、劉向『新序』雜事篇、『史記正義』引『高士伝』、『論

衡』非韓篇に、第二十二章は、『韓非子』説林下篇、『渚宮舊事』卷二、『説苑』權謀篇に、第二十三章は、『呂氏春秋』似順論・似順篇、『説苑』權謀篇、『楚史稿』に類似の故事を載せる。また第二十四章については、『北堂書鈔』四〇政術部・奉使に『説苑云……』、『太平御覽』四〇二人事部・敘賢に『呂氏春秋曰……』としてこの故事が収められている。

(7) 本稿における『繆和』の釈文は、廖名春『帛書《易伝》初探』(文史哲出版社、一九九八年)の附録二の「帛書易伝図版」をもとに、廖名春『帛書《繆和》釈文』(『國際易学研究』第一輯、華夏出版社、一九九五年一月)、陳松長『馬王堆帛書《繆和》・《昭力》釈文』(『道家文化研究』第六輯、上海古籍出版社、一九九五年六月)、鄧球柏『帛書周易校釈(增訂本)』(湖南出版社、一九九六年八月)、EDWARD L. SHAGHNESSY, I CHING: THE CLASSIC OF CHANGES, BALANTINE BOOKS, 1997『繆和』《昭力》改進釈文(林亨錫碩士學位論文附録「前漢周易易傳佚篇之研究——以帛書《繆和》・《昭力》篇為中心」附録、一九九七年五月)、廖名春『《繆和》釈文』(上掲『帛書《易傳》初探』所収)、趙建偉『出土簡帛《周易》疏證』(萬卷樓、二〇〇〇年)、また、筆者が参加している東京大学大学院池田知久教授のゼミにおける荻野友範氏配付のレジュメを参照した。

(8) 主術篇の冒頭には「人主之術、處無爲之事、而行不言之教、清靜而不動、一度而不搖、因循而任下、責成而不勞」とある。

(9) 『説苑』に収められる故事・説話が劉向自身の手になるもの

でないにも関わらず、その編纂には一定の意図があることに就いては、池田秀三『説苑 知恵の花園』（講談社、一九九一年）を参照。

(10) 以下、召類篇の冒頭の原文を掲げる。

四曰、類同相召、氣同則合、聲比則應。故鼓宮而宮應、鼓角而角動。以龍致雨、以形逐影。禍福之所自來、衆人以爲命焉、不知其所由。故國亂非獨亂、有必召寇。獨亂未必亡也、召寇則無以存矣。凡兵之用也、用於利、用於義。攻亂則服、服則攻者利。攻亂則義、義則攻者榮。榮且利、中主猶且爲之、有況於賢主乎。故割地寶器、戈劍卑辭、屈服、不足以止攻、唯治爲足。治則爲利者不攻矣、爲名者不伐矣。凡人之攻伐也、非爲利則固爲名也。名實不得、國雖強大、則無爲攻矣。兵所自來者久矣。堯戰於丹水之浦、以服南蠻。舜卻苗民、更易其俗。禹攻曹魏、屈鯀有虞、以行其教。三王以上、固皆用兵也。亂則用、治則止。治而攻之、不祥莫大焉。亂而不討、害民莫長焉。此治亂之化也、文武之所由起也。文者愛之徵也、武者惡之表也。愛惡循義、文武有常、聖人之元也。譬之若寒暑之序、時至而事生之。聖人不能爲時、而能以事適時。事適於時者其功大。

(11) 前注参照。

(12) 楠山春樹「呂氏春秋の形成——「解在乎云云」の句をめぐる——」（『早稲田大学大学院文学研究科紀要（哲学・史学編）』第三十三輯、一九八七年）参照。

(13) 伝存文献においては「左伝」莊二十二年、「史記」陳杞世家・田敬仲完世家に、觀六四の爻辭の引用が見えるが、これら

はいずれも田完の故事におけるものである。

(14) 近藤浩之「馬王堆漢墓帛書『周易』研究概説・中——『帛書周易』研究の現状と課題——」（『中国哲学研究』第十一号、一九九八年三月）では、「易曰」以下を別の章と見做しているようであるが、上掲『帛書『易傳』初探』附録二所収の「帛書易傳圖版」によれば、觀六四の引用と「易曰」の間には、分章の標識である「・」は置かれていない。また、「易曰」以下に、再度、觀六四が引かれていることから、これらはひとつの章であると考えるべきであろう。

(15) 『經典釈文』には「懂懂」を掲出し「馬云易行貌。王肅云往來不絶貌。廣雅云往來也。劉意未定也」とあり、『周易集解』には「懂懂、懷思慮也」という虞翻の説を載せる。また、『經典釈文』には「懂、京作懂。字林云懂遲也」ともある。

(16) ただし、一部、象伝と共通の方向性があるようである。

(17) 例えば、第二十四章にみえていた「外志」の語は、管見の限り伝存文献にはその用例を見出せず、このほか「繆和」第二二章および第二十三章に二例がみえるのみである。

（筑波大学大学院）